

論文の和文要旨

フィジー語バトゥレレ方言の述語構造と結合価変更プロセス

岡本 進

本稿ではフィジー語バトゥレレ方言の述語構造と結合価変更プロセスを、ほかのフィジー諸語との対照を交えながら記述した。本稿は記述的な研究ではあるものの、フィジー語バトゥレレ方言の特異性を明らかにするため、類型論的な考察も加えた。本稿のデータは筆者のフィールド調査による。

第一章から第四章は本稿の導入部である。

第一章ではフィジー語バトゥレレ方言について予備知識を提供した。当言語はフィジー共和国バトゥレレ島で話されており、系統的にはオーストロネシア語族、マラヨ=ポリネシア語派、オセアニア諸語に属す。フィジー諸語内では、西部フィジー語に位置付けられ、標準フィジー語を含む東部フィジー語と、音韻的・文法的・語彙的に異なる特徴を示す。

第二章はフィジー語バトゥレレ方言の音韻論を概説した。五母音体系や開音節構造など、典型的なオセアニア諸語の特徴を示す。標準フィジー語と異なる点として、軟口蓋音に円唇・非円唇の区別があることが挙げられる。「語末から二番目の音節に強勢が置かれる」という強勢規則と二重母音の形成は、後述する音韻語を認定する上で重要な役割を果たしている。

第三章は、Geraghty (2002) の枠組みに基づく文法スケッチである。そこで記述したいいくつかの特徴は、のちの章で詳述した。概して、当言語は VO 語順の言語の特徴を示す。すなわち、冠詞は名詞に先行し、前置詞を使用し、関係節は主要部に後続する。

第四章では、フィジー語バトゥレ方言において、「語」はいかに定義されるべきかを論じた。当言語では、音韻的境界と文法的境界が食い違うことがある。そのため、「音韻語」と「文法語」の二種の語を設定することが、当言語を分析する上で有効である。音韻的統一性は文法的統一性の引き金とはならず、その逆も同様である。例えば、名詞抱合は単一の文法語であるものの、複数の音韻語から形成される(第八章)。一方、前置詞動詞は単一の音韻語であるが、単一の文法語(すなわち他動詞)として機能することはない(第九章)。興味深い点は、先行研究でも指摘されているとおり、音韻語と文法語の境界が一致しないことがあるということである。前述の前置詞動詞における前置詞は、音韻的には先行する動詞と音韻語を形成する。そのことは二重母音の形成により確かめられる。一方、文法的には後続する名詞句とともに文法語を成す。なぜなら、前置詞は後続名詞句が周辺項であることを標示する機能を担っているからである。「語」に加え、「接辞」や「接語」も当言語でいかに定義しづらいかを述べた。

第五章から第十章はフィジー語バトゥレ方言の述語構造と結合価変更プロセスに焦点を当てている。

本稿で記述したフィジー語バトゥレ方言の特徴の中には、ほかのフィジー諸語にも当てはまるものも多くある。第五章では述語の構造を記述した。動詞だけでなく、名詞も形容詞も述語の主要部になりうる。そのため、フィジー諸語において品詞を設定するのは困難である。本稿では、語彙クラス(名詞、動詞など)と統語機能(項、述語など)を区別した。バトゥレ方言を含むフィジー諸語では、語彙クラスと統語機能が密接に結びついていない。換言すれば、形態論のプロセスを伴うことなく、名詞・動詞のどちらも、項・述語として機能しうる。そのため、「名詞句」や「動詞句」という術語は慎重に扱う必要がある。なぜならば、それらはその主要部が名詞や動詞に限られることを、暗に示しているからである。述語は節内の必須項と一致する拘束代名詞を含む。ほかの西部フィジー諸語と同様、当言語の拘束主語代名詞には、時制の区別がある。それぞれに非過去形と無標形があり、前者は現在や未来の事態に用いられ、後者は過去の事態を表すほか、従属節に現れる。標準フィジー語にはこの区別はない。それに加えて、述語内には任意の修飾要素も現れる。修飾要素は述語内の決まった位置にしか現れず、主要部の前に現れる群と後に現れる群とに大別される。このような特徴から、当言語は主要部標示型言語であるといえる。ただし、述語はふつう複数の音韻語から形成される。

第六章では、当言語は「他動詞化言語」であることを示した。すなわち、自動詞から他動詞を派生する傾向が強い言語である。この一般化はほかのフィジー諸語にも当てはまりそうである。バトゥレレ方言を含むフィジー諸語の他動詞は二種類に分けられる。一つは「S = A 動詞」で、無標の自動詞の主語が他動詞の主語に相当するような動詞である。もう一つは「S = O 動詞」で、無標の自動詞の主語が他動詞の目的語に相当するような動詞である。典型的な他動詞は、これらの自動詞に接尾辞を付加することで派生される。他動詞の複他動詞化は、接周辞的なプロセスで行われる。その際、被使役者（すなわち元の主語）が目的語として現れ、元の目的語は周辺項に降格する。このことは、フィジー語バトゥレレ方言が「二重目的語構文」を持たないということの意味する。複他動詞は次の第七章で取り上げた。「殺す」や「燃やす」のように、動詞の意味的他動性が高い場合、他動詞は接尾辞なしで現れうる。「恐れる」のような感情など、ほかの言語では形容詞で表される事態も、他動詞構文を用いて表す。本章は Nichols et al. (2004) の枠組みを用いて、フィジー語バトゥレレ方言における動詞の自他交替パターンを記述した。

第七章では複他動詞、つまり動作主、移動物、受け手の三つの参加者を要求する動詞を扱った。その際、Malchukov et al. (2010) の枠組みを採用した。フィジー語バトゥレレ方言において、「あげる」のような典型的な複他動詞は *indirective* 型の格配列を用いる。すなわち、移動物項が目的語として現れ、受け手項が周辺項として現れる。一方、「投げる」のような投擲動詞や「食べさせる」のような使役動詞は *secundative* 型の格配列を用いる。すなわち、受け手項が目的語として現れ、移動物項が周辺項として現れる。本稿の複他動詞の分析は、Malchukov et al. (2010) の類型論モデルに疑問を呈するものである。より具体的には、彼らの提供している意味地図内において、投擲動詞の位置づけを捉えなおす必要がある。「教える」のような発言動詞は、動詞の形態変化なしでどちらの格配列も用いるという点で特異である。この「教える」の特異性は、類型論的に広く適用できるかもしれない。

本稿で扱ったいくつかの側面は、従来のフィジー語研究で記述されていない。第八章では当言語の名詞抱合を記述した。名詞抱合は、目的語名詞と動詞が並置され、一つの複合動詞を形成するプロセスであるといえる。従来、フィジー語を含むオセアニア諸語の名詞抱合は、しばしば一種の自動詞化として分析されてきた。フィジー語バトゥレレ方言でも同様の名詞抱合が観察される。興味深い点は、名詞抱合が他動詞化し、新たに目的語をとりうるということである。この通時的変化は、Mithun (1984) の名詞抱合についての仮説に合致し、類型論的に価値のある発見である。それに加えて、名詞抱合が他動詞化されるということは、それが単一の文法語であることを裏付ける。しかし、名詞抱合は音韻的には複数の語から成る。

フィジー語バトゥレレ方言に特有のもう一つの特徴は、第九章で「前置詞動詞構文」と名付けた構造である。この構造では、本来後続する名詞句に音韻的に依存する前置詞が、先行する動詞と音韻的に一つの語を形成する。その振る舞いは少なくとも音韻的には接尾辞に類似している。なぜなら、先行する動詞の強制パターンを移動させるからである。一見、その音韻的統一性から、前置詞動詞は一種の他動詞、すなわち適用構文として分析できそうである。事実、世界の言語の中には、通時的に前置詞や後置詞に由来する形態素が、適用化の接辞として機能しているものも多い。しかし、前置詞動詞の前置詞は、文法的には決して先行動詞と結合しない。名詞句の移動や疑問文の形成などにより、前置詞動詞の名詞は必須項（すなわち目的語）ではないことがわかる。第四章で述べたように、ここに音韻と文法の不一致が観察される。

第十章では存在文と所有文を記述した。どちらも存在動詞を用いるという点で共通している。しかし、フィジー語バトゥレレ方言の存在文・所有文では、存在動詞だけでなく数詞も述語として機能する。特に *hila* 「一」は、無標の存在動詞として機能する。本稿では、数詞を動詞の下位分類として分析した。前述のとおり、当言語は「他動詞化言語」であるものの、所有文では他動詞を用いない。その代わりに、所有者は名詞句内あるいは周辺項として現れ、所有物は主語として現れる。存在動詞や数詞を用いる叙述所有に加え、名詞句所有もこの章で記述した。ほかのフィジー諸語と同様、フィジー語バトゥレレ方言も譲渡不可能と譲渡可能の区別がある。前者は所有物名詞に直接付加される所有接辞によって所有者が示される。後者は類別辞と所有接辞とが組み合わさり、所有物名詞に先行して現れる。

結論として、フィジー語バトゥレレ方言は、必須項と周辺項とが明確に区別される言語であるといえる。必須項とは、述語の拘束代名詞と一致する項である。一方、周辺項とは拘束代名詞と一致せず、必ず前置詞と共起する。前置詞と共起する項が必須項の特徴を持つことはない。例えば、前述の前置詞動詞のあとに現れる名詞句はあくまで周辺項であり、いくつかの統語テストから目的語ではないことが確かめられる。同様に、前置詞で標示される所有文の所有者名詞句は、「斜格主語」とはみなされえない。